

一般家庭児童と施設入所児童における自尊心の差異について

About the differences in self-esteem between children living in child care institutions and those living in one or two parent house holds.

吉 田 絵 美

要 旨

児童養護施設入所児童の自尊心 (self-esteem) の低下とそれにより生じる諸問題は、後に児童に深刻な爪痕を残す可能性が高く、早急な対応が叫ばれている。本研究では、まず自尊心を概観し、そのメカニズムや測定法をまとめた。

そして、現時の一般家庭の児童の自尊心の状態を「児童期の自尊心尺度」を用いて測定し、児童養護施設入所児童のそれと比較した。その結果、一般家庭の児童よりも施設入所児童のほうが自尊心が低く、施設入所児童に対し自尊心を改善させるために援助的介入を導入することの必要性が示唆された。

キーワード：自尊心 自尊感情 self-esteem 児童養護施設 児童

1. 序論

1-1. 児童養護施設入所児童に関する諸問題

児童福祉法第41条によると、児童養護施設は、『保護者のない児童（乳児を除く。ただし、安定した生活環境の確保その他の理由により特に必要のある場合には、乳児を含む。以下この条において同じ。）、虐待されている児童その他環境上養護を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせて退所した者に対する相談その他の自立のための援助を行うことを目的とする施設とする』と定義されている。近年、この児童養護施設へ入所する児童が平成5年以降増加し続けている。その理由として、父母の行方不明・父母の離別・父母からの放任・虐待など家庭や家族の機能不全により、適切な監護が受けられない児童が増えていることがあげられる。なかでも、虐待による入所が増えており、児童相談所への児童虐待相談件数は、調査を開始した平成2年度では1,101件であったが、平成20年では42,662件を記録している。これは児童虐待が18年間で約39倍に増加していることを示している（厚生労働省、2009）¹⁾。

正常に機能した家庭で育った児童に比べると、施設で育った児童は hospitalism に代表されるような、心身に特有の問題を抱える可能性が高いとされている（西澤、1994）²⁾。

hospitalism とは、幼児期に親から離され、長期間施設や病院に預けられることによって起こる心身の発達の障害のことである。精神的側面の特徴としては、知能の発達の遅れや情緒的不安定、社会的不適応傾向があげられる。また、Dorota (2003)³⁾によると、虐待を受けた児童の心の中に圧倒的な恥辱・自己疑惑が植えつけられるとされている。そのような児童は、自分の行動能力に自信がなく、自分は必ず失敗すると思込み、自信・達成感・自負心は絶え間のない不信に取って代わるようになるという。すると、新しいことに挑戦しなくなり、発達が遅滞し、健全な対人関係を築きにくくなるといわれている。

児童養護施設入所児童の抱える問題として、学力不振、学校不適応、社会不適応、対人関係でのトラブルなどがよくあげられているが、それらを引き起こす元となるものが自尊心の低さであるといわれている(遠藤・井上, 1974⁴⁾; 井上, 1986⁵⁾; 菅, 1975⁶⁾)。自尊心は自己概念に関する感情とされており、精神保健の基盤となる概念である。したがって、健全な自尊心は、健全な社会-情緒的適応に必要な不可欠であるといえる。つまり、入所児童の抱える心理的な問題に対し、特に自尊心に焦点を当てた方策が効果的だと考えられる。

これらの特徴が原因となって、職員の指示に従わずに粗暴で乱暴な振る舞いや言葉遣い、盗みや無断外出、規則を守らない、すぐにきれやすいといった、様々な問題行動をひき起こす(西沢, 1994)²⁾。児童の引き起こす問題行動の中には、児童の生活全般において直接指導にあっている施設職員によっても対応しきれないケースがあり、その深刻さは年々増している(厚生労働省, 2009)¹⁾。厚生労働省は、この傾向に対して平成11年度より予算を組み、それぞれの児童養護施設に対し心理療法を行うための非常勤職員等を配置することで、入所児童に対する心理的な支援の基盤をより強固なものとするべく動き出している。

1-2. 自尊心の概念とその研究の変遷

自尊心は研究諸家により様々に定義されている。そこで、以下に自尊心に関する主要な研究を述べる。

James は、1890年に初めて自尊心の心理学的実証的研究の可能性を明らかにした。彼は、自尊心の問題を自我の領域における自己評価の感情として取り上げ、願望(要求水準)と成功(失敗)の経験とを結びつけた(南, 1993)⁷⁾。次いで Rosenberg (1965)⁸⁾ は、その自尊心を質問紙法により明らかにしようとした。Rosenberg によると、自尊心は社会層、宗教または性別に影響されず、むしろ出生順位と強い関連性があるという。

一方、Coopersmith (1967)⁹⁾ は、自尊心を、「自分自身に対する積極的および消極的な態度」と定義づけた。さらに Coopersmith は、James と Rosenberg の他にも Mead, Horney, Rogers, Fromm らの諸研究をまとめ、自尊心における7つの特性を明らかにした。それは、①自尊心は、個人による自己の価値についての認知であること。そして、このような認知は自己評価であるが、②その基準は重要な他者を含む人間関係のなかで形成されるものであるこ

と。③自尊心は社会的環境の変容によって変化を受けるが、逆に自尊心の変化は社会的環境を変化させるものであること。④自尊心は比較的永続的であること。⑤個人における自尊心には異なる領域があること。⑥自尊心の性・年齢・文化などによる差はないこと。⑦そして、自尊心とパーソナリティ特性とは関係があることの7つである。また、自尊心を構成する因子として、自己の適切性、自己の不適切性、自己拒否、消極的自己・仲間関係、両親家庭関係、積極的自己・仲間関係の6つの因子があることも明らかにした。このような Coopersmith の考えは多くの研究者に支持されている (Pope, 1992)¹⁰⁾。

ここでは、2つの主な研究の流れについて説明したが、これら以外にも自尊心は様々な研究されている。日本においては森口 (1993)¹¹⁾ が自尊心を『自己の全体、もしくは、自ら価値を認める自己属性について、自己評価を維持し、高めたいと欲する心』と定義している。self-esteem とは、人が持っている己を尊ぶ気持ち (self-respect) や、自己受容 (self-acceptance) を包括した、自己概念に関する感覚および感情のことである (遠藤, 1992)¹²⁾。また、Rosenberg および Coopersmith が自尊心を特性と同じように個人のなかで安定した評価と考えたことに対し、現在では、状況によって変動する自尊心の存在も研究されている。

1-3. 自尊心形成のメカニズム

一般に、自尊心は自己概念についての評価の結果によって生じるものであるとされている (森口, 1993)¹¹⁾。自己概念とは、「自分は～である」というように、対象化された自己についてのある統一的なイメージであり、大きく5つのカテゴリーによって構成されている。それは、自己の現状の認識と規定、自己への感情と評価、他者から見られていると思う自己、過去の自己についてのイメージ、そして、自己の可能性及び志向性のイメージである (梶田, 1985)¹³⁾。

また、蘭 (1989)¹⁴⁾ は、乳児期 (0歳-1歳) には「他者からの評価や承認よる気づき」が、幼児期 (8, 9ヶ月-5, 6歳) には「同一視に基づく取り入れ」が、そして児童期 (6, 7歳-12歳頃) には「役割遂行や様々な経験による気づき」が、自己概念を形成していくうえでそれぞれ強く影響するとしている。

乳幼児期には維持すべき自己評価が定まっていないため、自己の評価基準は保護者など自分が保護を委ねている人の評価反応そのものとなる。しかし、幼児期以降になると生活圏の拡大と共に一般的な社会規範や価値が自己評価の目安となり、社会的普遍性を持つ尺度に照らし合わせた自己評価によって自尊心を維持しようとする動きがでてくる。また、社会的に承認された価値に自己を近づけようという欲求も現れてくるといわれている。特に、児童期になると、友人や仲間、交友集団による評価の基準が重要な要因になると考えられる (柏木, 1983)¹⁵⁾。

一方、児童養護施設などで生活する児童は、保護者と離れ様々な年齢の仲間と共に日常生活を送っているため、施設内における集団構成員間の評価反応が自己概念形成に強く影響を与え

ると考えられる (蘭, 1989)¹⁴⁾。そして, 一般の家庭で生活する児童と同じように, 施設で生活する児童も, 児童期には仲間における交友集団内の評価基準が重要になる。しかしながら, そのような評価基準は, 児童自身の能力を常に正確に捉えているわけではない。愛野 (1971)¹⁶⁾によると, 児童の技能と能力の客観的評価と自己評価とは非常に矛盾しているという。つまり, 児童は自己の持つ力を客観的に把握することはできるが, 自分の能力以上の目標を掲げがちであるため, 自己の持つ力を十分なものと認められないのである。

更に, 乳児期, 幼児期において重要とされる「他者からの評価や承認による気づき」と「同一視に基づく取り入れ」などの要因は, その保護者に判断基準が委ねられているため, 適切な家庭環境でなければ肯定的な自己評価は育ちにくいと思われる。児童養護施設入所児童は家庭に問題を抱えている児童が多く, 肯定的な自己評価が形成されにくい要素を抱えていると考えられる。このような自己評価を改めるためには, 児童の認知を改め, 新たな評価基準を形成する必要があるといえる。これらのことをまとめると, 児童の自尊心形成には Figure に示される関係性が考えられよう。

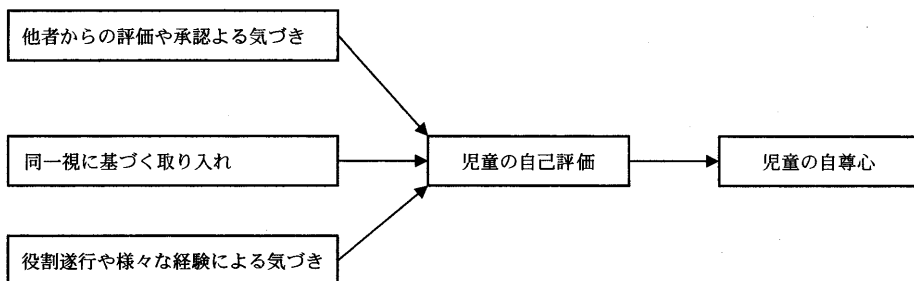


Figure : 児童の自尊心形成における要因のモデル図

1-4. 自尊心の測定法

自尊心の測定法としては, 質問紙が最もよく使用されている。なかでも, Rosenberg (1986)¹⁷⁾の自尊感情尺度, や Coopersmith (1967)⁹⁾の自尊心尺度が最も有名である。このほかにも, Pope (1992)¹⁰⁾や Ziller (1969)¹⁸⁾などにより様々な測定法が考案されている。しかし, 各測定尺度が意味する因子については異同も多く, 自尊心の研究結果を解釈するにあたりどの尺度を用いたかを十分に考慮する必要があるだろう。

Rosenberg (1986)¹⁷⁾の自尊感情尺度を用いて測定される自尊心は2つの意味を持つとされている。1つは, 自分を「非常によい」と考えることを意味し, もう1つは「これでよい」と考えることを意味する。つまり自尊心が高いということは, その個人が自分自身を尊敬し, 価値ある人間であると考えているということである。これらは個人の全能感を意味しているのではなく, むしろ成長や改善の期待と限界を知っていることを意味している。この尺度は, 星野 (1970)¹⁹⁾によって翻訳され, 日本でも頻繁に使用されている。今回使用する Coopersmith

(1967)⁹⁾による児童期の自尊心尺度は、簡素な表現による質問項目で構成されており、読みやすい。また、「私は何でもすぐ好きになる。」など、児童の実際の状態に言及した質問が多く、内省力の未熟な児童でも答えやすいという特徴がある。

1-5. 目的と仮説

これまで自尊心を概観し、そのメカニズムや測定方法について論じてきたが、現時での一般家庭で生活する児童や児童養護施設入所児童の自尊心状態に関する記述は少ないようである。そこで本研究では、一般の家庭で生活する児童及び児童養護施設入所児童の現時の平均的な自尊心の状態調査と、それぞれにおける自尊心の性差を検討することを目的とした。さらに、自尊心が単純な時間経過により変動するかを検討する。その際に、Rosenberg (1965)⁸⁾やCoopersmith (1967)⁹⁾の研究結果から、自尊心得点は性別や時間の影響を受けないという仮説をたてた。

また、一般的な家庭で生活する児童よりも児童養護施設入所児童のほうが自尊心が低い(遠藤, 1974⁴⁾; 菅, 1975⁶⁾)という先行研究の結果を再度確認する。

2. 方法

2-1. 日時及び場所

本研究は、質問紙を配布し、対象児童に回答を求め収集することで行われた。一般家庭から通学する児童に対する質問紙は、6月20日(1回目)と11月20日(2回目)の2日、A市立B小学校の小学校4・5・6年生の各教室で配布され、収集された(回収率:1回目100%,2回目99.14%)。

また、児童養護施設で生活する同年代の児童には、7月3日に同施設会議室にて質問紙を配布・回収した。

2-2. 被験者

本研究は、A市立B小学校の小学校4・5・6年生233名(男児118名,女児115名)と、児童養護施設Cの小学校4・5・6年生10名(男児4名,女児6名)を対象とした。年齢幅は、それぞれ9歳-12歳であった。

2-3. 質問紙

本研究では自尊心を測定するため、「児童期の自尊心尺度」を使用した。本尺度は、Coopersmith (1967)⁹⁾のSEI (self-esteem Inventory)に基づき井上 (1986)⁵⁾によって作成された、41項目(肯定的項目23,否定的項目18)からなる質問紙である。各項目とも「はい」、「いいえ」、「どちらでもない」の3件法で回答する方式をとっている。それぞれ自尊心が

高いとされる回答の順に 2 - 0 点を与える。従って、理論上の得点範囲は 0 - 82 点である。

2-4. 手続き

実験者は、質問紙を配布するクラスの担任に事前に本研究の意図を説明し、同意を得た。さらに、実験者は担任に質問紙を実施する方法と、実施するうえでの注意点を説明した。

ホームルームの時間を使用し、各教室にて担任が「児童期の自尊心尺度」の質問紙を児童に配布し、質問紙の記入に同意を求めた。児童の同意が得られてから、担任が以下の教示 1 を行い、児童が質問紙の意図を十分に理解したと判断したうえで、質問紙に回答させ、30 分後担任が回収した。

(教示 1：これは、あなたが「今の自分」をどのように思っているかを調べるアンケートです。まず、名前のところにあなたがたの名前を書いてください。このページをめくると質問が書いてあります。めくったら、学年、年齢のところを書いてください。次に、先生が質問を読みあげるので、それに合わせて一緒に答えていってください。勝手に、先に進まないようにしてください。そして、全部答え終わったら、抜けているところがないか、もう一度確認してください。何かわからないことがあったら、手をあげてその都度質問してください。)

3. 結果

一般家庭から学校に通う児童と、児童養護施設入所児童のそれぞれの自尊心得点を集計し、平均値と標準偏差をまとめたものが Table である。一般家庭の児童における 1 回目調査時の自尊心得点について、男女の得点について対応のない t 検定を実施したところ、その平均値間に有意な差はみられなかった。また、2 回目調査時の自尊心得点についても、男女の得点について対応のない t 検定を実施したが、1 回目調査時と同様に男女間の平均値に有意差は認められなかった。施設入所児童における男女の自尊心得点差を、Mann-Whitney の U 検定を用いて検討した結果、両群間に有意性は認められなかった。

初回調査と 2 回目調査により得られた自尊心の総得点について、対応のある t 検定を用いてそれらを比較検討したが、有意な差はみられなかった。

なお、一般家庭の児童（1 回目）と入所児童の総得点について、Welch の方法を用いて比較した結果、施設入所児童の自尊心総得点が有意に低いことが明らかとなった ($t(9.70)=2.65, p<.05$)。

Table：児童の自尊心得点の平均値と標準偏差

	一般家庭児童（1回目）			一般家庭児童（2回目）			児童養護施設入所児童		
	男児 (n=188)	女児 (n=115)	総合 (n=233)	男児 (n=188)	女児 (n=113)	総合 (n=231)	男児 (n=4)	女児 (n=6)	総合 (n=10)
av.	61.20	60.89	61.08	60.18	58.18	59.47	57.25	49.50	52.60
s.d.	8.96	10.13	9.32	11.10	9.53	10.25	14.08	3.45	9.42

*82点満点

4. 考察

初回調査時における一般家庭児童の自尊心得点の平均値は61.08 (SD=9.32) であり、2回目は59.47 (SD=10.25) であった。これらは井上 (1986)⁵⁾ により示された自尊心得点の平均値61.92に近似した値である。従って、本研究は井上の知見を支持し、一般的な家庭で暮らす小学校高学年の平均的な自尊心得点の値を確認することが出来たといえよう。

性差についても検討を行ったが、初回調査時及び2回目調査時に有意な差はみられなかった。この結果は Rosenberg (1965)⁸⁾ や, Coopersmith (1967)⁹⁾ の研究結果を支持しており、自尊心が性別の影響を受けないことを再度確認することができた。更に、初回調査時と2回目調査時の自尊心得点の平均値を比較検討したが、有意な差が認められなかったことから、自尊心は時間的経過による再検査の影響も受けないことが明らかとなった。以上のことから、自尊心は人格特性に類似した持続的な個人的特徴であり、時間の単純経過及び性差は自尊心の変容に寄与する変数としては考えにくいといえる。

また、施設入所児童の自尊心が一般的な家庭で生活する児童よりも低いことが確認された。これは、遠藤 (1974)⁴⁾ や菅 (1975)⁶⁾ の研究を支持するものであり、約35年前と変わらず、施設入所児童の自尊心は通常よりも低いことを表している。改めて自尊心向上のための介入の必要性が示唆されよう。

自尊心を改善するため、現在までに様々な理論を基に数多くの手法が考案されている。(遠藤, 1992)¹²⁾。Pope (1992)¹⁰⁾ は、児童に対し認知行動療法を行うことで自己概念および自尊心に直接作用する方法を提案している。また、鹿内 (1978)²⁰⁾ に代表されるように、原因帰属理論的観点から、児童の失敗体験を外側に、成功体験を内側にそれぞれ帰属させていくという認知療法も研究されている。しかしながら、これらの方法は、実施者と対象児童の双方に負担が大きく、認知療法や認知行動療法を行うための専門的な知識、時間、場所など様々な資源が必要となる。集団で効率よく簡便に実施できる、自尊心向上のための手法を模索していく必要がある。

引用文献

- 1) 厚生労働省 2009 児童相談所における児童虐待相談対応及び子どもの虐待による死亡事例等の検証結果等の第5次報告。
- 2) 西澤哲 1994 子どもの虐待 子どもと家族への治療的アプローチ 誠信書房。

- 3) Dorota Iwaniec (著) / 桐野由美子 (監修) / 麻生九美 (訳) 2003 明石ライブラリー 50 情緒的虐待 / ネグレクトを受けた子供 - 発見・アセスメント・介入 明石書店.
- 4) 遠藤辰雄・井上祥治 1974 Self-esteem の研究 九州大学教育学部紀要, 18, 53-65.
- 5) 井上信子 1986 児童の自尊心と失敗問題の対処との関連 教育心理学研究, 34, 10-19.
- 6) 菅佐和子 1975 Self-esteem の対他者関係に関する一研究 - 青年期を対象として - 教育心理学研究, 23, 224-229.
- 7) 南博 1993 原典による心理学入門 講談社 457-459.
- 8) Rosenberg, M. 1965 Society and adolescent self-image. Princeton: Princeton University Press.
- 9) Coopersmith, S. 1967 The Antecedents of Self-Esteem. W. H. Freeman & Co.
- 10) Pope, A., Susan, M. (著) / 高山巖 (監訳) 1992 自尊心の発達と認知行動療法 子どもの自信・自立自主性を高める 岩崎学術出版社.
- 11) 森口兼二 1993 自尊心の構造 松籟社.
- 12) 遠藤辰雄 1992 セルフ・エスティーム研究の視座 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋 (編) セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ出版.
- 13) 梶田毅一 1985 子どもの自己概念と教育 東京大学出版会.
- 14) 蘭千尋 1989 子供の自己概念と自尊感情に関する研究 上越教育大学研究紀要, 8, 17-35.
- 15) 柏木恵子 1983 子どもの自己の発達 東京大学出版会.
- 16) 愛野正晴 1971 自尊感情 (self-esteem) の研究 - 自尊感情の型とその心理的要因 - 九州大学教育学部卒業論文.
- 17) Rosenberg, M. 1986 Self-concept from middle childhood through adolescence. In J. Suls & A. Greenwald, Psychological Perspective on the Self. Vol. 3. Hillsdale, NJ.: Lawrence Erlbaum Associates.
- 18) Ziller, R. C., Hagey, J., Smith, M. D. & Long, B. 1969 Self-esteem: A self-social construct. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 33, 84-95.
- 19) 星野命 1970 「感情の心理と教育 (2)」 児童心理24, 1445-1477.
- 20) 鹿内啓子 1978 成功・失敗の帰因作用に及ぼす self-esteem の影響 実験社会心理学研究, 18, 35-46.